【報告】

利用者本位の博物館をめざして
— 博物館協会1998年度大会報告 —

Towards an User Friendly Museum Community
— Report of the Museums Association 104th
(Portsmouth) Conference, November 1998 —

岩本陽児*
Yohji IWAMOTO

イギリスの博物館協会 (The Museums Association—以下MAと略称します—) は、世界でも最古の博物館プロの団体です。104回目という本年度の大会は、1998年9月21日から25日にかけて、EXCELLENCE AND INNOVATION というテーマのもとにイングランド南部の軍港都市ポーツマス の旧市庁舎で開かれました。

セッションの数は全部で73と近年では最も多く、参加者名簿には海外からの参加も含めて600人を越える名前が、相変わらずの盛会でした。会場に併設された見本市には41業者が参加していました。これに市内、近郊の博物館や文化財の見学ツアーが加わります。本年の大会を振り返ってみると、総会の議決を経て「博物館の定義」に変更が加えられたことがとくに重要な成果でした。

日本とイギリスとではもちろん、博物館をとりまく事情も違うことは多々あります。しかし、かつてサミュエル・ハンティントンが、専門職の要件として、専門的機能の他に社会的責任と団体性という三点を指摘していたように (Huntington, S. P., *The Soldier and the State*, Harvard University Press 1957, ISBN 0674817362)、博物館プロ集団が民主主義社会の一員として果たすべき役割に関して、つねに歴史の先頭を走りつづけてきた国における経験の蓄積には、私たちの参考になるものが含まれているかもしれません。

まる五日間、朝から晩までぎっしりの日程で、例年と同じく内容の濃い大会でしたが、なるべく会場の雰囲気が伝わるようにご紹介してみます。もしかしたら議論の背景についての私の説明が十分でないために、わかりにくい箇所があるかもしれません。不明な点がございましたらご遠慮なくお問い合わせください。

なお日本からは、昨年に引き続いて本学会員の竹内有理さんの参加がありました。

1998年9月21日月曜

開幕の国務大臣演説

大会の日程は、月曜の午後一時から、文化、メディア、スポーツ担当国務大臣のクリス・スミス議員国務大臣演説で開幕しました。これは単なる政治家のご挨拶ではなく、45分という時間をかけて、政府の文化政策を博物館関係者に直接訴えて理解と協力を求める機会でもあります。文化予算への追加支出2億9千万ポンドに関しては、出しばなしでなく、成果 return を期待していますと政府の基本的な考え方を述べたあと、国立博物館への総額一億ポンドの支出、博物館・美術館局 (MGC) と図書館・情報局 (LIC) の合併、地方行政の再編成、コレクションによって優劣をつけてすぐれた館には総計1500万ポンドの補助金を交付するという、近年開始された博物館の指定制度や、芸術・文化財に関する「ウォッ

*レディング大学大学院、英国田園生活博物館
(Museum of English Rural Life, University of Reading)

平成11年3月1日受理

チドッグ（番犬）計画」など、5項目について、政府の意図するところが報告され「異種間交配」という言葉を使いながら、博物館界との双方向のコミュニケーションによってこれらを実り多いものにしたという意向が大臣から表明されました。なお、2000年紀に入った頃をめどに、議会に文化行政に関する新法案を上程する予定だというアナウンスもありました。

これに対して、MA では、10月7日までに協会としてのコメントを返すということで、会員の皆さんは積極的に、MA 事務局までご意見を寄せてくださいという要請がありました。このように、年に一度のこの大会は、参加会員の意見を吸い上げる機会にもなっています。

博物館教育の分科会

月曜の第二セッションは、3会場で分科会が開かれました。私が参加したのは97年の10月に既存の機関が統合されて発足した QCA（資格認定・カリキュラム局）の職員のヘイゼルさん、ルースさん、スウさんがスピーカーとなって行われた「教育担当者を教育する」という博物館教育の分科会です。こういう、ひとひねりしたタイトルが、このMA大会には少なくありません。

イギリスのほとんどの博物館では、従来から、88年教育法で導入されたナショナル・カリキュラムの各キーステージに対応した教育活動を行ってきています。そのカリキュラムが本年一月に変更されたため、ナショナルカリキュラムの現状がどうなっていて、今後の予定はどうかという説明がまず第一に行われました。

学校教育カリキュラムの変化として、教科の中で歴史・美術・音楽が選択科目になったこと、学校にはバランスのとれた教科を教えるようアドバイスがされていること、特に主要教科でない6つの教科に対する内容的な要求が大幅に減らされ、社会的、モラル的、精神的（Spiritual）な市民性の涵養が目指されていることと、自由度を増すことで学習者が教科と資格獲得との間を動きやすくすることが期待されているということが報告されました。現在の大学入学資格であるAレベル試験の比率を相対的に低下させることが意図されているとのことでした。

次に、QCAの事業について、紹介がありました。これは特に16歳以降の子どもたちへの教育政策の変化を背景としており、博物館や美術館、遺跡などの現場で行われる教育を支援するために、博物館職員、学校教師、教員養成大学の教員などを対象としたプロジェクトに取り組んでいるということが紹介されました。

最後に、6つの事例研究の紹介が行われ、それから、今後、事例研究に取り組む際のポイントが紹介されました。地域で博物館が学校と連携してすぐれた教育実践をつくりあげ、その報告書も出して、最終的には政府による補助金が利用できるようにしようというのがその趣旨です。

事例研究の手順については、計画の設定にはじまって、調査期間の設定、共同研究者へのアプローチ、研究チームの結成、利用する施設の限定、博物館・美術館での学びの特性の把握、目標の設定、いくつかの評価方法といったものが具体的に、段階を追って紹介されました。

「調査のために連絡先を開拓していく際には、先方の住所よりも電話番号の方がはるかに役に立つことがあります」、「調査の開始前からそのつもりで準備しておかないことには、“評価”は難しいですよ」というような具体的なヒントや「博物館で行われている言葉づかいは学校や子どもの言葉づかいと違っていることがありますから、注意してください」というアドバイスもあり、博物館の皆さんにとって有益なことだったろうと思いました。

これにあわせて、ビジュアルで読みやすい報告書づくりのポイントも紹介されました。報告書は印刷する他、インターネットでの公開も考えてはどうかというアドバイスもありました。なお、この会場の40～50名の参加者のうち、約三分の二がインターネットを利用しているということでした。

同時時間帯に「非国立館の入館料徴収政策」「文書資料を最大限に活用する」という分科会がありました。

パネルディスカッション、博物館の「支援体制」

お茶休みをはさんで、次は全体会。スミス国務大臣による開会演説をうけるかたちで「支援体制」というタイトルの、一時間のパネルディスカッション

が開かれました。

この間の政府の文化政策の背景に、生涯教育という発想があること。

だが、実際のところ施策が十分とはいえず、博物館と図書館が一括して扱われていること。

政府の「ウォッチドッグ」計画もまだ、海のものとも山のものともつかないこと。

政府が補助金を出してくれるのは歓迎するとして、その方法の問題。

これまでに8500万ポンドが国立大規模館に交付されたけれども、現場にはそれで十分だとは認識されていないこと。

無料入館制の不明瞭な将来。

国務大臣のいう「指定博物館を国中の学校が利用できるようにする」という発想が、トップダウン式の文化を作りはしないかという懸念。

政策の中で、私立博物館への言及が少なく、政府からの補助金が「投資」と言われているわりには僅かなものであるという批判。

地域の文化・経済機関を地方政府がどのように育てようとしているかも問題であるということなど、さまざまな問題点が指摘されました。(なお、98年秋の段階で、1ポンドは日本円にして230～240円に相当しています)。

フロアからは、近年の政策の変更で図書館と博物館が一括して扱われるようになったおかげで、双方ともに、よけい経済的に困窮するようになったという実態が報告されました。スコットランドの代表からは、指定博物館という政策自体が、イギリス国内でも豊かなイングランドとウェールズ中心の発想のものであるという批判がよせられました。

ICOM 事務総長による基調講演「地球規模化する文化財の盗難について」

引き続き30分は基調講演。ICOM 事務総長のマナス・ブリンクマンさんが世界規模で起こっている文化財の盗難について報告し、博物館界の注意を喚起しました。この問題については、MA でも「倫理綱領」の最初の回で取り上げていました。

「大型の哺乳動物がこの10年か15年の内に絶滅に瀕していると言われているジャーナリスティックな

状況に比較すると、文化財の盗難・隠滅はなるほどインパクトの少ないものです。しかし、従来からの腐敗政治家、官僚、兵隊その他に加えて、今日では国際機関、多国籍企業、旅行者も、地球規模での文化財の違法な取り引きに関与するようになっており、過去の文化アイデンティティが消滅寸前の地域さえあります。例えば、ニジェールデルタ地帯では、登録された考古学遺跡が800か所あるうち、すでに60パーセントが盗掘されています。この調子でいけば、西暦2005年までにすべて盗掘されてしまうことになります」

「対策として、盗難文化財台帳の作成、収蔵品目録による監査（インベントリチェック）、発掘のコントロール、収蔵品の ID システムなどが考えられています。ICOM では96年にアフリカの文化財のハンドブックを出版しましたし、イギリス政府は盗品の全国リストを作成しています。盗品は、発見され次第もとの所有者に返還される決まりですが、いったん盗まれてしまうと発見、返還されるのはほんのわずかにすぎません。トルコでは昨年796点の文化財が盗難に遭いましたが、うち博物館からの盗難が301点あり、発見されたのはわずか一点だけでした」。

実効性からいえば、フランスのように業者の売買がひとつひとつモニターされるような制度が望ましいとのこと。盗難に遭ったものの、幸い発見、返還された世界各地の文化財が、スライドで上映されました。

この問題については、ユネスコでは早くも1970年の条約でとりあげており、ICOM も96年に倫理コードを規定しました。ただ、ICOM の会員が、イギリスにはまだ520人。ドイツの1500人、フランスの1400人と比べて少ないため「イギリスの皆さんもぜひ会員になってください」という呼び掛けがマナスさんからありました。豊かな国の一員である日本の博物館にとっても、他人ごとでは済まされない問題かと思います。

この問題に関して、MA の総裁（プレジデント）のバーバラ・ウォロンコウさんからは、イギリス政府が国際条約にサインするようロビー活動を続けているというコメントがありました。

なお、ここで、MA の名誉総裁のエリザベス皇太

后から、大会にお祝いのメッセージが届いたということで、披露がありました。エリザベス女王の母君である彼女は90いくつという高齢にもかかわらず健在で、イギリスの文化財や自然環境の保護団体として有名なナショナル・トラストの名誉総裁でもあります。

MA の総裁演説

引き続き、総裁のバーバラさんによる「総裁演説」が30分間ありました。今期で引退する彼女にとっては、2年間の任期の総まとめということでもあります。

「博物館が政治の日程に上るようになったというのは、注目すべきことです。もちろん、国立博物館の入館料の問題なのですが、すべての館が入場無料になるという「うわさ」がたったほど、博物館へのアクセスがすべての市民にとって基本的な権利だということが、これで明らかになりました」

「現在のところ、ロンドンの国立博物館が話題の中心となっていますが、地方館の役割も重要で、新しい補助金の創設が期待されています。この2年間、MAの総裁として国内各地の館長に会いました。国立館が不当に優遇されているという批判もありますが、その国立館もふくめて、一様に資金不足という問題を抱えていることが分かりました。それでも国立館は職員のスキル（技能）、資格などで世界の最高水準にあります。それぞれの館が結集して声を上げていくことが必要です」

「博物館コレクションの指定制度については、重要なコレクションを非国立館が持っていることも多いという問題があります。コレクションの重要性の認定に時間がかかっているのは残念です。非国立館にも関心を払わなくてはなりませんし、そもそもコレクションを評価するための公的な手だてがないのが問題といえましょう」

「博物館・美術館局、博物館館長会議などのネットワークのほか、千年紀奨励計画（ミレニアム・アウォード・スキーム）などによって、クリス国務大臣のおっしゃる「異種間交配」が実を結びつつあります。それだけに、博物館をベースにした学術的な研究が重要になってきています。市民のアクセスや教育について、国立館の役割が大切なことは言う

までもありませんが、地域の博物館でなくては出来ないような仕事だってあるのです。アクセスがよりよく行われるように、想像力を刺激するよりよい展示が行われるように、館の内外で、コミュニティを志向したユーザーフレンドリーな仕事を展開していきます」

「将来の福祉の創造のために、また、次の世代が育つてゆく（RE-GENERATION）ために、MAの果たすべき役割はこれまでに大きく大きくなってきています」。

大会初日は、その後、社交プログラムとなり、当地の市長の招待によるレセプションや、ポーツマス港に係留されている戦艦ウォリアー一号を会場にした恒例のディナーなどが催されました。

9月22日火曜日

地域づくりと博物館

火曜日午前中はまず「政策と博物館—新しい議題」というタイトルでパネルディスカッションが開かれました。パネラーの市会議員、政府職員、博物館長はいずれも北部の旧産炭地ニューカッスル市の皆さん。労働党の牙城として知られる町です。博物館の所属する文化セクターは、雇用者数でいえばすでに自動車産業の2倍で、銀行やビルディング・ソサエティ（民間の住宅金融組合）よりも大きくなっていること。ただし、多様かつ労働集約型であり、技能が重要であることなどが紹介されて、新労働党政府の文化政策のなかで、博物館がどのように位置づけて考えられているのか、その文脈を明らかにすることの必要性が提起されました。

次に来館者の新規開拓という問題について、博物館に来ない人を対象とした調査結果から「たいくつ、古臭い、ゴシックだ」という主に地域の若者の声がいくつも紹介されました。もちろんこれは博物館に来ない人がもっているイメージですから、実際に博物館に来てみたら、違った印象を持つようになるかもしれません。

第三のポイントとして、地域づくりの核としての博物館の役割について、無料入館制度、国立館の役割などと関連づけて論議されました。フロアーからは「声を上げていかないと流れに乗り損なって、後

からだと言えなくなってしまうから、博物館界としてとにかく声を上げていくことが必要です」というコメントもありました。

同じ時間帯に開かれたのが「すぐれた博物館建築」。最近の博物館建築や、興味深い改装例をとりあげて、見栄えのいい建物を作りたい建築家の欲求と、使い勝手の良い建物を作ってほしい博物館側のニーズをどう調整するかといった問題が議論されたとのことでした。

博物館専門職の養成

火曜日午前の第二セッションで私が出席したのは、博物館の職員養成の部会です。

従来、イギリスで博物館の学芸員となるには、学部を終えたあと、多くの場合は博物館である程度の実務経験をつんでから大学に戻り、大学院レベルでディプロマや修士など専門の資格を得ることが要件でした。ところがイギリスでは、最近、日本の文部省に相当していた教育省が教育・雇用省という名称に変更されたことから分かるように、政府の文化政策や教育政策が、雇用促進と結びついた生涯学習という発想のもとで大きく変わってきており、継続（在職）専門教育の役割がより重視されるようになってきています。

MA ではこうした動きと連動して、従来は名誉会員の称号として発行していたアソシエイトシップ（AMA）とフェローシップ（FMA）のタイトルを、実質的に博物館プロの在職訓練の一環として位置づけなおすために、近年、新たな取り組みを行ってきています。

前者については、新制度の第一陣の6名が認定されましたが、後者はまだ制度づくりの最終的な調整段階ということで、作業文書が会場に配布されて、会員からのコメントが求められていました。こうした資格認定が果たして、どの程度実効があるものかはまだ不明ですが、世の中が専門化するにつれて高度な資格社会になってきている現状を背景に、注目を集めているところでは、なお、MA はこうした資格を認定する一方で、各博物館に対して、資格保持者に給与面でしかるべき待遇を保障するように呼びかけています。

ここでフェローシップ授与作業班のスティーブン

さんから、新制度が博物館界の質を向上させることに貢献するものでありたいという抱負が述べられました。

次に、最近までロンドン博物館の館長だった博物館訓練協会のマックスさんからは、その事業内容について、生涯学習という発想のもとで政府の文化政策や教育政策が転換してきていることを背景に、博物館、動・植物園や水族館の他、民間団体のナショナルトラストや、イングランドの文化財保護機関であるイングリッシュ・ヘリティジや、ウェールズで同様の事業をおこなっている CADW などの6千人を対象に訓練事業を行ってきているという実績が報告されました。

教育雇用省では、訓練の目標として、戦略的な能力を養成すること、効果的な競争力をつけること、政府と雇用者に教育訓練のニーズをアドバイスすること、労働力が仕事を通じて能力を高めている現状を強化すること、をあげています。

フロアからは、若い頃に大学でもらった学位がすべてというこれまでの状況は権威主義だったとして、こうした試みを歓迎する発言もありましたが、一方、レスター大学のアイリーン先生からは、在職研修の一環として博物館が職員を大学に送る場合、修士号を取らせるため学費まで面倒を見ようというところはイギリス中にわずか4館しかないということが紹介され、ほんらい理論は実践に光を当てるものでなくてはならないのに、博物館界のニーズと、大学のニーズとがかい離してきていて、きびしい現状であることを理解していただきたいというコメントがありました。

この問題に関連して、その後の昼食時間と並行して、これから博物館プロを志す学生を対象にした「よろず相談所」が開かれました。会場にはレスター大学、ロンドン大学といった以前から博物館学の学科をもっていた大学の他に、ノッティンガム・トレント大学、グリニッチ大学、ロンドンシティ大学、ニューカッスル・オン・タイン大学など比較的最近になって博物館学や博物館マネジメントコースを開講したところ、それから V&A 博物館やバーミンガム大学のアイアンブリッジ研究所のようにもっぱら在職研修の機会を提供している機関がコーナーを開き、将来博物館プロを旨とする若い学生の問い合わせで盛

況でした。

ただ、1992年の大学改革でポリテクニク（専門学校）から格上げになった新しい大学のなかには、博物館関連のコースは出来たばかりで、卒業生が実際どういう進路に進むことになるかは今後の様子を見ないと分からないというところもあります。大学の方も近年構造改革が進んでおり、教育内容を多様化してなるべく多くの学生を惹きつけたいという事情もあるようです。

この時間の裏番組としては、「文化戦略を開発する」「ボランティアの訓練とマネジメント」そして「古いオブジェクトに新しい光を当てる」という博物館におけるニューテクノロジーの3本のセッションがありました。「相談所」の方も、並行して「ボランティアと保存修復」「イギリスの博物館コレクションのデータベースと1999年の博物館週間」が開かれ、また同じ時間帯に「議員の集会」がもたれました。北部の町から来たというパキスタン系の市会議員に会いましたが、非白人の政治家の参加は、ここ数年で初めてのことでした。

ツーリズム（観光）に果たす博物館の役割

午後2時からの1時間半のセッションでは、私は、「博物館とツーリズム、未来のトレンド」に出席しました。

ここでまずはじめにスチュアートさんから紹介されたのが、博物館・美術館がいかにツーリズムに貢献しているかというイギリス観光局（BTA）とイングランド観光局（ETB）による実態調査の結果です。

それによると、博物館・美術館への訪問は、回数では全体の16%の163万人に過ぎませんが、イギリス国内の観光に関連して動く総額273億ポンドというお金の45%が博物館・美術館に関連したものだといえます。カントリーハウスや庭園なども含めるとは思いますが、ちょっと膨大な数字なので、どういうデータのとり方だったのか興味があります。

それから、海外から来た人の51%が古城や博物館・美術館を訪ねているというデータも紹介されました。旅行者の内訳を見るとは89年段階ではヨーロッパが63%、北米が20%だったのが、97年になるとヨーロッパが68%と上昇した分、北米が16%と

なって北米の地位が低下しています。97年のお金の落ち具合で見ると、ヨーロッパが50%、北米が21%なのに対して、旅行者数が16%であるその他の国々による支出が29%と突出しているのは、ことによると日本人観光客の皆さんのお土産購入が貢献しているのかもしれない。

1989年を100とした指数で、昨年（97年）の支出総額は147、旅行回数は122でしたが、2003年にはそれぞれ179、146になると予測されています。最近ポンド高が進んでいますから、いささか楽観的にすぎような印象を受けました。（私のこの考えを裏付けるように、この大会にやや遅れて公表された英国政府観光庁の年次報告は「ポンド高の影響で、英国の観光業界は計3万人の雇用機会と10億ポンドの収入を逸した」ことを明らかにしています。）

次の報告者はMGC（博物館・美術館局）の博物館開発官のヘンリエッタさんです。「生活の本拠地以外の土地に短期間移ること」といったツーリズムの定義の紹介などのあと、博物館と地元自治体の観光課との連携の大切さがアピールされました。

MGCでは今後も、ビジターのニーズを明らかにする作業など、博物館とツーリズムをつなぐ仕事を続けるとのことで、相談事業、ファクトシートの配布、セミナーの開催などが計画されています。

文化財とツーリズムのコンサルタントのテリーさんからは、MGCの実施した海外観光客のイギリス博物館・美術館訪問の実態調査の概要が紹介されました。ロンドンにある2515の博物館のうち、政府観光局（ツーリズムボード）に加盟しているのは633館に過ぎないことなどが報告され、来館者の獲得のためには、観光部門との緊密な関係づくりが課題であると提起されました。

ビクトリア時代に栄えて、今日、観光都市として有名なバース市とその周辺で文化財担当官の仕事をしているスティーブンさんからは、事例研究が紹介されました。まず、市内にある衣装博物館がインターネットのホームページを開いてコレクションを紹介したところ、アクセスの平均が7分余りと、インターネットの閲覧にしては例外的といってよいほど長時間であることから、単なるイベント情報よりも、コレクションの内容そのものに関心が持たれていると判断されるという興味深い指摘がありました。

観光客は、町の中心部の交通渋滞と引き換えに、年間2億ポンドというお金を町に落としていてくれるようですが、文化財サービス部門の年間予算が400万ポンドであるのに、収入は630万ポンドと、230万ポンドが自治体の収益となっており、おかげで住民税（カウンスルタックス）を世帯あたり30ポンド引き下げているとのこと。遠くからおいでいただいた観光客の皆さんにお金を落としていただき、地域住民に還元しているという図式でしょうか。現実の問題として、ビクトリア時代の晩餐の間を貸し部屋に使って、レスリングや犬の品評会などもおこなっているようですが、こうした業務も学芸員が行うように一本化された結果、建物の保存に配慮した管理・運営が出来るようになったのはむしろ良かったということでした。これによって、ふつうなら博物館に縁のないような人に博物館をアピールでき、来館者開拓の上からも良好な結果が得られているということです。ただ、文化財に指定されているような由緒ある建物を貸し館として使用するようなことは、日本の常識では考えられないことかもしれません。

このバースでは、政策の基本としてサステイナビリティ（将来的にも立ちゆくものであること）、繁栄、生涯教育という三点を掲げ、なかでも、サステイナビリティを支える三本柱として、保全活動を通じた文化財保存、利用者への提示（present）、商業行為の推進を定めています。

質疑の時間には、地域の小型館が連携することの効果指摘されていました。

同時間帯には、他に「クオリティ・マネジメント＝質の高い博物館」「研究と奨学金」「チームで仕事をする」という3つのセッションがありました。

博物館への補助金交付の諸問題

30分のお茶の時間をはきんで、4時からは全体会場で「文化財くじ基金 Heritage Lottery Fund と新千年紀体験会社 The New Millennium Experience Company の役割」というパネルディスカッションが開かれました。司会は大英博物館の館長のアンダーソン博士です。

文化財くじ基金については、昨年の大会に参加していた布施美穂会員による研究論文が「博物館学雑

誌」第23巻第1号（97年12月）に掲載されましたから、すでにおなじみか思います。ただ、イギリスは良きにつけ悪きにつけ政策の変更が早く、この基金も例外ではありません。2千年紀、つまり西暦2000年の到来を祝って、これまでにない博物館の建設ラッシュが予想されていたのですが、補助金の裏付けが怪しくなってきたため、やむをえず計画を変更したところが、最近、少なくありません。

すでに開幕の国務大臣演説で、クリスさんから直接「2001年以降も、宝くじによる補助金は現在の水準で継続する」という方針が発表されましたが、今後3年の動向がいったいどうなるのかについて、これらの機関のトップからさらに詳細な話を聞こうというのが、このセッションの趣旨です。

新千年紀会社のジョーさんは、2千年紀の幕開けに祭典を求める声が多いこと、大衆が参加できるようなプロジェクトや参加型イベントを期待していること、各地の自治体が、ロンドンの東に建設中のミレニアム・ドームで催し物が出来るようにしたいということ、博物館セクターをそのお祝いの核と考えていること、海外からのお客を1500万人期待していること、大規模なボランティアの動員が必要となりそうなことなど、見通しを語りました。

まだ、補助金申請は可能ということです。二千年紀の到来に対する楽天的な考えを背景に、博物館は文化の磁石として、国民の教育にあたるものだという声も聞かれました。

私立館の置かれている状況

5時からのセッションでは「21世紀の博物館のための新たなビジョン」と題して、私立(independent)博物館協会(AIM)が行った同名の調査報告がレビューされました。

イギリスでは社会のポスト・インダストリー状況に対応して、過去15年の間、一週間に一館のペースで新設館が開館してきました。その大半が私立館です。このようにセクターとしては活力があるおかげで、良いこともある反面、悪いこともあります。例えば私立館の年間平均入館者数は、90年代を通じて、一館あたり7万8千人から4万5千人へと減少しています。過当競争による経営難のために閉館という事態も日常茶飯事となっています。

この調査では、組織、予算、経営という三つの判断基準から既存の私立館を分析したところ、優良館が全体の三分の一、悪くはないが改善の余地ありというものが三分の一、そして残り三分の一が、余り感心しない部類で、この範疇の館には将来、生き残れないものも少なくないだろうという結果が出たそうです。

教育に関しては、4割が教育設備を持っておらず、三分の二が正式な教育ポリシーを持っていないことがわかりました。この点については、博物館と学校、大学、図書館、民間企業との間の連携が求められています。

国内の、例えばスコットランドでは25～30%の予算減少が見込まれています。効果と効率、経済性を追究しながら、現状を分析する必要が指摘されましたが、将来計画を持っていない館が全体の3割、マーケティングポリシーを持っていない館に至っては全体の8割という現状も明らかになりました。商業目的で、法人によって利用されることの重要性もあわせて指摘されました。

この他、私立館の抱えている問題を解決するための主要なポイントとして、質の高い意志疎通を実現すること、教育における地域社会との協力、調査による来館者の属性の把握、より良い博物館運営と運営状況のモニター、館外との連携、運営状況の考察と予算措置のための新モデル、より調和した声をあげていくこと等が指摘されました。

田園地帯の野外博物館

その夜は、貸し切りバスに乗って一時間ほどのところにある、サセックス州のウィールド・ダウンランド野外博物館を見学しました。風向明媚な田園地帯のなかにある20ヘクタールの敷地に、農村の古い建物が移築されて、中世の村の景観を形づくっている野外博物館です。そこここで羊やブタやニワトリが飼われ、昔ながらの農法でボランティアによって畑が作られています。夕暮れ時なのに、私たちのために駄馬がすきを引いて畑を起こして見せてくれました。また、丘の上では炭焼きが行われていました。

中世の草ぶきハーフティンバー（木骨漆喰）の家からは、木を燃やす煙の懐かしい匂いがただよって

きます。内部に入ると中心部はかなり広めのホールになっていて天井がなく、土間に直接、炬がつくってあるという、中世らしい建築です。骨組みは太いオーク材を縦に半裁したもので、内装も主要な部分はオーク材でつくられています。驚いたことに階段は板でなく、20センチ以上ある角材を三角に挽いたもの。600年も経っているのにびくともしないほど頑丈で、にぶい黒光りを放っていました。二階の床はオークでなく、エルムの、厚さ3センチはあろうかという美しい厚板を使った贅沢な板張りになっています。ヨーロッパのエルムの木は、眺めてよし使ってよしの銘木だったのですが、今世紀になってから立ち枯れ病のおかげで全滅してしまい、もはや、いくらお金を出しても買えない幻の木になってしまいました。

その家は二階の一角が展示コーナーになっていました。そこで目についたのが「この野外博物館の展示物はほとんどすべて昔ながらのものですが、飼われている家畜だけは現代の品種ですから、誤解のないようにお願いします」という表示です。中世の家畜品種は、現在、世界中どこにも残っていないのだそうです。家畜のいないイギリスの村の景観は考えられませんが、生きた動物はその存在自体ビジターに与えるインパクトが強いだけに、科学的な正確さとのあいだで葛藤があるということでしょう。

流れのほりにある水車小屋では、そこで挽いた小麦粉や、それで作った昔ながらのクッキーなどを販売していました。「アヒルの小麦」もおいてあります。つまり、粉にする前の小麦です。こうした小麦は他所から買って来たものだそうで、この畑で穫れたものではないというのが少し残念でした。

この館では教育活動にも熱心で、農村の伝統技術を保存し、伝えるために、各種の講習会も随時開かれているそうです。子どものための展示やワークショップも用意されていました。ここでは、年間を通じて木造の建物の解体・修復を行うようにするため、大型の覆い屋を建設するプロジェクトが進行中ということでした。冬期は閉鎖となります。

9月23日水曜日

博物館における多文化政策

水曜日、午前の第一セッションは「働く仲間の多

様性」という部会に出席しました。これは、91年の人口調査段階ですでに大ロンドン都市圏の人口の5人にひとり、全国平均にして5.5%がエスニックマイノリティ（人種的な少数者）によって占められているというのに、全国で7万人の雇用者（うち常勤は2万5千人）をもっている博物館の場合、その出身者が職員全体のわずか2.5%しかいないという、博物館界の立ち遅れをどう打破するかという討論の場です。

イギリスでエスニックマイノリティと言えば、インド、パキスタンなどの南アジア系や中国系などが代表的ですが、実際のところ、この国で生まれた二世、三世が全体の47%にも達しているそうです。彼らの85%が25歳以下であり、16歳から19歳までの後期中等教育を受けている人の割合が全国平均で50%なのに対して、エスニックマイノリティの場合はそれが66%と、国民全体の中でも教育水準がとりわけ高い部分でもあります。これは上昇志向と言っても良いかもしれません。

今回は、この大会としては初めて、南アジア系、中国系などエスニックマイノリティ出身の博物館職員3名が登壇し、彼女たちが博物館に勤めるようになった個人的な経緯も含めて、現在の仕事内容や将来の抱負を語ってくれました。つい昨年までは、この問題についてもっばら白人が議論していたわけですから、博物館をとりまく状況が少しずつ変わりつつあることが実感されました。

引き続き同じ会場で10時から行われた「文化的な多様さに応える」と題されたセッションでは、社会政策づくりのためにMGCの委託調査として実施された、エスニックマイノリティの人々の、博物館に対する意識調査の結果が報告されました。

そこで彼らの博物館訪問を妨げているものに、単なる言語の障害、つまり解説が英語だけしかないということの他にも、博物館の歴史解釈がミドルクラスの白人中心の史観であること、「自分たちのところから盗んでいった」モノを展示していること、さもなくば女王やビクトリア時代のものばかりで見たいものが展示されていないことなどがあり、そういう展示が変わったら子どもを連れて見にいてもよいと思っているということなどが紹介されました。今後、期待される方法論として、イギリス社会に対

してエスニックマイノリティがどのような貢献を行ってきたのかといった歴史的な事実や、エスニックマイノリティの美術・工芸、それに彼らがこの国にやってきてからの物語を写真やオーラルヒストリーの手法で展示することなど、エスニックマイノリティの人々が関心をもっているものを博物館が出してゆきながら関係を深めていくべきだ、というのが、この調査の主要な結論でした。

このように、イギリスの博物館では、文化的な多様さを課題として認識するだけでなく、それをいかにして現実のものにするかという態勢づくりが議論されている段階です。博物館をもっともっと多くの人々にとって居心地の良いものに変えていくために、職員が変わること、とりわけ博物館長や理事など、トップのリーダーシップが発揮されることが期待されています。

この時間帯には、ひとコマ目に「良い、もっと良い、最高？ 博物館コレクションの評価」10時から「博物館とマーケット」「収集のポリシーと収集の領域、協同か競争か」というセッションが並行して開かれました。

博物館がユーザーフレンドリーになるために

お茶の時間をはさんで、次は「全員でひとつの目標に向けて」という1時間半のセッション。3人の報告者の一番手は大学の若手講師のリチャードさんで、オーディエンス・ディベロップメントつまり来館者の新規開拓とは何かという理論的な導入の話です。どこから手をつけたら良いか、確信のなさやスタッフのやる気をなくさせるものなど、何がその妨害となっているのかについて、具体的な説明がありました。

次は現場からの報告です。報告者のジョスリンさんはノッチングムの市立博物館のスタッフです。彼女がアクセス・マネージャーとして着任した当時は、館の職員がそれぞれに別のことを考えていて、紅茶に入れて飲む冷蔵庫のミルクさえ（そうと知らずに、彼女は腐ったのをカップに注いでしまったそうですが）学芸職と事務職とで別々。例えば考古学コレクションは「アレンの」コレクションというように、担当の学芸員の名前で呼ばれていたほど、スタッフが館内で別のことを考えており、てんでバラ

バラな状況だったそうです。

これではいけないということで、まず職員の意識を変える運動をおこし、マーケティングやアウトリーチ(出前)担当官のポストを設けたりしながら、従来のヨーロッパ中心主義の展示を改めていったそうです。解説づくりにも地域の人たちの参加を求め、例えば、従来はすぐれた美術品という評価でしか見ていなかった銀の燭台の解説に、見方を改めて「これは奴隷労働によってつくられたものです」という一文を追加したりしているということでした。

博物館が本当に「かったるくて、埃っぽくて、うんざりする」ものなのかどうか。従来、博物館にやってくるのはこういった人たちだと期待されていたのとは全く逆の人たちに来てほしいということで、子どもの教育活動にも力を入れているほか、車椅子利用者のアクセスのために、ねばりづよく当局と交渉して、とうとう博物館にエレベーターをつけたということも、スライドで紹介されました。この館は、建物が中世の城としての文化財指定を受けているところなので、いろいろな手続き上の困難を克服しなくてはならなかったそうです。

最後に、タイン&ウェア博物館の館長のディビッドさんが、管理職の立場から、目的意識を明らかにしたアクセスポリシーをつくって、利用者本意という発想でチームワークを推進しているという報告を行いました。ここで、会場に挙手が求められたのですが、こうした利用者のアクセスのためのポリシーをもっている博物館は、現状ではそれほど多くはありません。

質疑の時間には、昔と違って、地域のグループの声がそれほど小さくなってきているため、地元の声を反映させるには特段の配慮が必要であるというコメントがよせられました。また、本誌23巻第2号(98年3月)でロンドン博物館の実践をご紹介したときに注で触れていましたが、ジョスリンさんのノッチンガム市立博物館が、昨年、MGCの審査で登録館としての地位から格落ちになったという前代未聞のニュースは、この国の博物館関係者にとってショッキングなものでしたので、本題とは違うにもかかわらず、それを心配した質問が2、3寄せられました。彼女によれば、さいわい、市の緊急予算が組まれて、現在は登録館としての地位を回復してい

るとのことでした。

同じ時間帯に「博物館への新しい機会」という文化財くじ基金(HLF)と新千年紀体験会社(NMEC)および美術館・博物館局のポリシーとガイドラインについての説明の分科会、それから「新しい財産管理人、昔ながらのコレクション」と題したコレクションをどう使い、どう解説するかという分科会が開かれました。

コンピューターによる情報提供

昼食に並行して、「イギリスの博物館コレクションのデータベース相談所」というセッションが開かれました。これはMGCのプロジェクトで、イギリス中の博物館コレクション情報をウェブサイト上で利用できるようにするというものです。これまでの成果と今後の目標が報告されました。

ところで、博物館でも、この一年の間に、インターネットの利用が急速に進んでいます。ホームページを開設した博物館は少なくありません。

業者が最新の機器のデモンストレーションを見せてくれるのが楽しみな見本市でも、レバー操作で鉄器時代の村の中を歩きまわられて、画面に現れるハーブの音まで鳴らせるという、3次元イメージによる大型ディスプレイが展示されていました。

これは、ソフトウェアさえあれば、会場に展示されていた一台1万ポンド(約220万円)もする大型スクリーンでない、普通のパソコンでも表示できますから、家庭で事前の学習が出来ますよというのがセールスポイントでした。その場合、インターネットでダウンロードすることになりますが、その際に必要なメモリーの容量は140MB位だということでした。

このソフトウェアのお値段は、このデモンストレーションに使用されているベーシックなもので一万五千~六千ポンド(三百数十万円)ということですが、もちろん、お金さえかければ更にいろいろなことが出来るようになります。

人を歩かせたり、音楽を鳴らさせたりするオプションが、追加一件ごとに二、三千ポンドから四、五千ポンド(六~七十万円から百二十~三十万円)だそうです。

コンピューターの利用に関しては技術的にはまさに

日進月歩の状況で、イギリスの場合、政策的にPCの普及を推進していますが、これらの機材をどう使いこなして、質の高い博物館学習やレジャーを実現してゆくかという点で、学芸員の力量が問われていると言えそうです。

「万人のための博物館？」

水曜日の2時半からは「万人のための博物館？(MUSEUMS FOR ALL?)」と題して、パネルディスカッションがありました。これは、これまでの多文化政策の分科会の総括討論でもあります。まず、2分間という時間を区切ってパネラーが意見を述べ合いました。

- ・ 博物館は、図書館が棚に本を開架しているのと違って、棚にモノをあるだけ公開していない。博物館プロは信念を持ってモノと人をつなぐことが大切である。
- ・ アクセスという概念を深めるべきだ。博物館が誰に、いかにして届くのかということを追及、推進するという「選択」がカギになってくるだろう。
- ・ アクセスの前提には、人は放っておいても博物館に来るものだという発想がある。もし、人が博物館に来ようと思っていない時にどう動機づけを行うのが課題。
- ・ 時間に追われている業務だが、博物館を変えていくためには何かを始めないわけにはいかない。
- ・ 理想の実現のために力を合わせるといった民主主義のプロセスが大切である。
- ・ 博物館は昔は排他的な機関だったという認識から出発して、いかにそうでないようにしていくかを問うべきだと思う。
- ・ 心身障害者や貧困層の人々などが博物館に感じる敷居の高さをどうこわすかという挑戦が必要となっている。

これらの意見に対して、フロアからもさまざまな問題点が提起されました。

自治体職員やその子どもたちが博物館に来ていないという実態、博物館への来館者(ビジター)というより利用者(ユーザー)と言った方が好まれていること、博物館が文化的な権威の拠点として排他的な機関になってしまう危険が常にあること、「万人

のための博物館」という場合には市民を消費者としてとらえるべきではないこと、政府は博物館へのアクセスの拡大を奨励しているが、大蔵省は明快な用語の定義を求めているため、「博物館ユーザー」や「アクセス」、「博物館の経済効果」といった用語が何を意味するのかをこの数か月のうちに明らかにしなくてはならないこと、博物館が単独でアクセスを開拓するのではなく、行政の例えば青少年課のコミュニティ開発官など、地域に入っている人が蓄積したノウハウや人脈を博物館でも活用すること、などです。

学校との共催でイベントを成功させた事例や、インターネット時代に対応した博物館づくりの重要性についても指摘されました。

反論に再反論がでて盛り上がったのが、「つまんねえな」を連発する今日の青少年が「反博物館的な存在」になって来ているのではないかという意見です。ある子ども博物館の職員からは、子どものニーズが6ヵ月で変わるという現状にあわせて、内容を変えていかなくてはやっていけないというコメントがありました。

なお、MAの倫理委員会では「万人のための博物館」というタイトルの政策文書を準備中とのことで、会場にその草案が配布され、10月末までにコメントをお願いしますとの要請がありました。

この同時時間帯には、「領海、新しい波立ち」と題した海事博物館の地位向上のためのセッション、「トラストの位置づけをアップデートする」と題した、公立館が私立化している状況を討議するセッションがもたれました。トラストとは、英米法に特徴的な法人で、非営利目的の信託会社のことですが、内容的には日本で問題になっている財団法人化とほぼ同じものと考えてよいでしょう。

子ども博物館

午後のお茶の後、4時から全体会が開かれました。このセッションの前半は「好奇心と想像力のセンター」と題して、子ども博物館の理念を探求し、深めることについて重点的に議論されました。従来、この分野はイギリスでの立ち遅れが指摘されていたものです。

はじめに、子ども博物館ユーレカ(私立館)の館

長から、このセッションの趣旨説明があり、子ども博物館の6つのポイントが指摘されました

1. 子どものニーズに合わせること。
2. 同様に家族ぐるみで楽しめるようにすること。
3. 社会や人生、過去・現在・未来について学ぶこと。
4. 地域の習慣などに根ざすこと。
5. いろいろな人たちがやって来られるようにすること。
6. 展示の企画・設計に子どもをまき込むこと。

子ども博物館は、子どもの発達を中心に、家族で利用できる教育の場として、また地域コミュニティの催し会場として、更には職を創出し、職業訓練を提供する場所、障害者には出前（アウトリーチ）活動を行う拠点として、さまざまな可能性を持ったところだと考えられています。日本で公民館活動が目指してきた理念とオーバーラップするところが興味深いのですが、子どもを取り巻く親・教師、それに既存の民間地域団体と政府自治体の機関がネットワークをつくりながら地域の再生のためのコミュニティ開発に取り組んでいく場合、こうした子ども博物館が拠点となっていくことが期待されていることが分かりました。

最初の報告は、ソルガム谷のサリーさんによるアメリカの事例でした。学校教師がブルックランドに最初の子どもの博物館をつくってから百周年という歴史のあるアメリカでは、デューイやピアジェの心理学の影響もあって、子どもが好き勝手にふるまえるように館内の環境を整えるという方針で、子ども博物館がいくつもつくられてきました。すでに70年代の半ばには10館以上になっていたそうです。現在では各館の年間入館者数が25万人から40万人程度、年間予算も300万ドルから500万ドルという大規模なものになっています。90年代に入ってから、環境教育事業などにも力を入れるようになった様子が、スライドで紹介されました。

次はオランダのロッテルダム民俗学博物館の教育部長で、ヨーロッパ子ども博物館ネットワークの議長でもあるフレッド・ワルトナさん。もともとその博物館は、その名の通り、植民地の民具を収集するために百年も前につくられた館だそうですが、近年、

方針を大転換して、子どもの教育活動に力を入れるようになったということです。

その背景に、オランダの都市住民の多文化化があります。ロッテルダムの場合、住民の国籍は150か国にも上り、子どもの二人にひとりが、両親またはおじいさんおばあさんの少なくとも一人がオランダ以外で生まれているという状況なのだそうです。

「これまでは博物館の館内では子どもが子どもらしくふるまえなかった」という反省から、ロッテルダム広場の七千㎡の敷地が、子ども博物館として生まれ変わりました。

さて、この子ども博物館の中には町が出来ていません。教育プログラムは3本あるそうですが、11、2歳の学童向けの2時間半のプログラムから、楽しい情景がスライドで紹介されました。パジャマ姿で昼寝していた「博物館長さん」を、子どもたちが声を合わせて起こすところから始めて、やがて服を着替えて現れた彼に館内をあちこり案内してもらって「発見」をするという趣向です。最後は、教室に入って、子どもたち自身が館内での発見についてディスカッションをして締めくくる設定になっています。

このプログラムでは、子どもたちの館内での様子をビデオに収めておき、学校に帰って教室で復習できるように、そのカセットを帰りしなに「博物館長さん」からプレゼントしてもらえるそうです。

最後はイギリス勢で、貧困層の多い東ロンドンのストラトフォード地区に新設が決まった「子ども発見センター」の現在までの経過を、ピーターさんが報告しました。

これは96年から博物館建設構想が本格化したもので、政府に補助金を申請したりしながら、自治体とも折衝を続けた結果、公有地を提供してもらえることになって、法人格を得るための基本財産づくりにも成功し、目下、構想がだいぶ煮詰まってきた段階ということです。

これまでの調査結果にもとづいて、東ロンドンの6つの地区に住んでいる11歳までの子どもと親、それから付き添いの人（ケアテイカー）に焦点を絞ることが決まりました。付き添い人を来館のターゲットに含めたというのは、片親世帯も多いうえ、必ずしも親が子どもの面倒を見ているのではないということが分かったからだそうです。

貧困世帯の多い地域のため、サウスケンジントンの科学博物館に行こうとすると、入館料の他、交通費等で高くつくから行かないという声に配慮して、入館料は公営プールやハンバーガーの「ビッグマック」と同じ額と決まりました。

主要な計画としては、子どもの言語発達を支援すること、子どもや家族が自信をもって地域で暮らしていけるようにすること、コミュニティのための集客機能を持たせることなどです。

建物は4階建てで、敷地面積は2万平方フィートといえますから約550坪に相当します。珍しいのは、博物館の運営経費を捻出するため、隣接して貸しビルを建てることになっているということです。

民主的な運営をしていくために、子どもの意見を取り入れることはもちろん、学校や地域団体の代表などからなる「子どもたちのフォーラム」が影の博物館運営委員会になる予定ということでした。

「クエスチョン・タイム」

会場における最後のプログラムは、同名のBBCテレビの人気番組のパロディでした。司会のロバートさんご自身、ホンモノのテレビ番組司会者です。彼は文化財に造けいが深く、V&A博物館でボランティア活動も行っているとか。

平日の夜おそくに放映されているBBCの番組は、有力政治家などをパネラーに迎えてイギリス各地を回り、時事問題に関して本音を聞きだそうという、なかなか質の高い硬派番組です。今回のパネラーはビルグリム・トラストや王宮管理局（HRP）のダイレクターやハンプ州の県知事といった「お偉いさん」たちでしたが、会場からのとんでもない質問に四苦八苦したり、絶句したりしていました。

会場からの質問をいくつかご紹介しましょう。

「この大会は、埃っばいガラスケースから埃っばい人たちが年に一度出てくる唯一の機会だという意見がありますが、いかが思われますか？」

「イギリスには博物館が多すぎるというふうには思われませんか？」

これについて司会者が会場に挙手を求めたところ、なんと約七割の人が、博物館が多すぎるという方に挙手をしていました。おそらく、自分の館は多すぎる部類には入っていないものと思われる。

「なぜ博物館は白人の機関でありつづけるのですか？」という質問に対しては「ニワトリと卵の問題で、原因は分からないけれども、少なくとも現状では博物館が白人の文化財になっている」から「エスニックマイノリティにもふさわしいように再解釈することが必要だ」と指摘されました。「現状を変えていく政策を推進していけば十年後にはだいぶ変わっているだろうが、押さないかぎり現状のままだ」という声もありました。

このように、面白半分、まじめ半分のイベントですが、その中には、「館長は博物館プロがつとめるべきである」とか、「政治家は5年後の選挙のことしか考えていないが、博物館プロはその先を考えなくてはいけない」、「この国の政治はダウニング・ストリートの10番地、12番地（首相官邸）で決まっている。クリス・スミス（開幕演説の文化相）はイズリントン選挙区だから違う」。補助金提供団体である文化財くじ基金のイングリッシュ、ヨーロッパ中心の発想や、国立博物館の理事を任命しているのが、古い体質の王立委員会だという現実を批判して「イギリスが世界に誇るカントリー・ガーデンの花壇で見栄えのする花は、例外なくみんな海の向こうからやってきたものです」と美しい喩えで多文化政策を擁護するものなど、興味深い発言があいつぎました。

この時間帯には、別会場で、博物館考古学者のフォーラムも開かれました。

ポーツマスの各博物館でのイブニングレセプション

夜の6時から9時までは、大会参加者にポーツマスじゅうの博物館が公開されました。海軍基地の一角には王立海軍博物館、戦艦ウォリアー号、戦艦ビクトリー号のほか、水中考古学の成果として世界的に有名な戦艦メアリ・ローズ号と、海底から引き揚げられた遺品の博物館などが博物館コンプレックスをつくっています。他にも市立博物館やノルマンジー上陸作戦のDデイ博物館、サウスシー城、王立海兵博物館があります。10分おきに会場をつなぐ連絡バスが運行していたのですが、私は市立博物館の古文書室で、文書官のポールさんの助けを得ながら岩倉使節団のポーツマスでの宿の所在調査に熱中していたため、あっという間に時間がなくなってしまって、海軍基地ではビクトリー号のガイドツアー

に参加しただけというのが残念でした。市立博物館は、地域の自然史、考古学、社会史、美術とまんべんなくフォローした総合博物館ですが、通路脇に復元された中世の農民の寝室で、しどけない姿のお人形がいびきをかいているという展示が出色でした。こうした博物館の見学記については、インターネットで公開していますのでご覧いただくと幸いです。

英国の博物館

<http://www.personal.u-net.com/~hakubutukan/index/INDEX.html>

9月24日木曜日

この日、朝のうちには第一セッションに「さわれるものたち、貸し出しによる学習」「目と目の間で、現代美術にアクセスできるようにする」、それに「相談される立場とする立場」という MA の新アソシエイトシップ (AMA) に関する分科会と「博物館を通じた学習キャンペーン」の4本、お茶の時間の後で「巡回展」「博物館と美術館、視覚的な世界と実体験」「博物館はお互いに何を学び合うことができるか」「人々との実践的なパートナーシップ」というセッションが開かれました。竹内会員によると、とても面白いセッションだったそうです。実は私は、前の晩の調査結果に興奮して、さっそく朝のうち現地探査に行っておりまして、ご報告できなくて残念です。

この朝の収穫は、明治の初めに岩倉使節団が泊まったサウスシー・ビーチマンションホテルというところが、現在、ホスピタリティ・インと名前を変えて、同じ建物で営業を続けているのが判明したことです。いくらイギリスには古い建物が多いと言っても、130年近くも前のホテルとなると、建物が取り壊されないまでも、閉鎖になっていたりして、岩倉具視が泊まった部屋に今でも泊まれるホテルというのは、それほど残ってはいないのです。私の説明を聞いて、このホテルの受け付けのお嬢さんも驚いていました。

そういうことがあって、私が会場にやって来た時には、全体会場で、MA 会員のミーティングの時間になっていました。

おりから、MA の倫理規定への理解を深めるため、半日の訓練コースを開く予定であること、それから、

今後は雇用関係についても、トラブルが発生してから対処しているという現状から一歩進めて、基準づくりに取りかかりたいという委員会方針が発表されていました。

98年度 MA 年次総会

引き続き、同じ会場で年次総会が開催されました。総裁のバーバラさんにより、これが1985年の会社法に定める総会であることが宣告されます。報告を担当したのは公認会計士でしたが、すでに年次報告書と議題は会員の手に郵送されていまして、議事は順調にはかどりました。

MA はこのところ、組織としても順調な成長をとげており、個人会員数はこの5年間で5割増し。団体会員も600機関あまりになっているそうです。ただし、こうした団体を評価する際のポイントは、会員への利益が向上しているかどうかという点にかかっているので、出版物やセミナーなどを大いに活用してくださいとのこと。

総会議事として、MA 評議員に地方自治体議員の代表を加えるという変更と、会員の最高ランクであるフェローシップ (特別会員) を専門職訓練の一環として位置づけなおし、フェローは MA の行動憲章の遵守を書面で誓約のうえ、MA 評議会の規定するフェロー規定を遵守するといった変更が、出席会員の4分の3以上の賛成を必要とする特別決議として裁決され、いずれも満場一致で採択されました。それから、改正に当たっては過半数の賛成が必要という通常の議決ではありましたが、博物館の定義の改訂が採択され、これも満場一致で可決されました。これは重要な変更です。

改訂の趣旨は、博物館を利用者本位に定義しなおすということにあります。提案の趣旨説明では病院の喩えが紹介されました。つまり、病院というところは長らく、医者・看護婦の立場から「医療器具を整えて待機しておき、患者を社会から隔離して、治療を施す場所である」と認識されていましたが、これを患者本位に見ると「人が調子の悪い時にやってきては癒されてふだんの生活に帰っていく場である」ということになるというわけです。こうした認識の転換を博物館に適用するとどうなるかというのが、この改訂のポイントでした。

新たな博物館の定義とは、次のようなものです。 Museums enable people to explore collections for inspiration, learning and enjoyment. They are institutions that collect, safeguard and make accessible artefacts and specimens, which they hold in trust for society.

平易な英文なので、かえって日本語に直すのが難しいのですが、仮に「博物館は、人々が、靈感を得たり学んだり楽しんだりするためにコレクションを探究することを可能にする。それら博物館は、信託によって社会のために保有している文物および標本類を、収集、保管し、利用可能なようにする機関である」と直訳しておきましょう。

また、コレクションについては、以下のように解説されました。

an organised assemblage of selected material evidence of human activity or the natural environment, accompanied by associated information. As well as objects, scientific specimens or works of art held within a museum building, a collection may include buildings or sites.

つまりコレクションとは「人間活動または自然環境の精選された物証で、関連する情報をともなって系統的に構成されたもの。同様に、博物館内に収蔵されたオブジェ、科学標本または美術品で、建物や遺跡もコレクションに含まれることがある」。

ここで保管と訳したsafeguardingには保存修復処置を施すこと、保安対策、コレクションの総合管理が含まれ、同様に making access には解説(interpretation)、教育、展示、館外活動、文書化、研究、出版活動が含まれており、博物館の内外は問わないという注がついています。また、英語の問題ですが、上掲した定義では複数形になっていた博物館は、単数として使用しても差し支えないと注記されています。

採決後あらためて、新たな定義のもとで、博物館を、モノを集め、守り、アクセスをつくってゆく、つまり利用者に親切(ユーザーフレンドリー)な、人々のための博物館に変えていきたいと思いますという呼びかけがありました。「コレクションは私たちばかりのものではなく、将来世代のものでもあります」という指摘もありました。

この変更に対して、MGCの代表からは、現行の博物館の登録制度じたいが博物館の旧定義に準拠したものであるので、定義の変更は重要な問題であり、MAの動きには関心を持って見守っているというコメントがありました。

引き続き、新制になって初めて誕生した新アソシエイト6名と、旧制度最後のフェロー10余名の授与式が行われました。

新 MA 総裁の所信表明演説

本年は総裁の交代の年で、おとしのハロゲイト大会から2年間総裁をつとめたバーバラさんはこの授与式をもって引退。新総裁は、マンチェスター科学産業博物館の館長、パトリック・グリーンさんです。今後2年間の任期中にどういうことに挑戦したいかという、所信表明演説がありました。

パトリックさんは、まず第一に、教育をどうしてゆくかという問題について、政府に働きかけていくそうです。第二に、他の機関とも協働しながら力強い声をまとめていくこと。第三に文化的な多様性の問題ですが、労働者の子弟の学生に対する差別待遇、つまり、あからさまに口には出されないけれども現実存在する博物館内部の階級制度をどうするかという問題を指摘しました。例えば「ここは天国ではない、ここは博物館なのだ」といって、同僚でもテーブルが違うというケースが実際にあったということです。第四に専門職としての倫理の強化・最後に、専門家としての情熱と喜びを大事にしていきたい、と語りました。

マンチェスターは労働者の町ですから、彼のリーダーシップのもとで、白人底辺層の市民にとってどれだけ博物館が身近なものになれるのか、期待されることです。

この後は、1時から3時までは、昼食に並行して「市場」と題した、関係機関、団体がスタンドを並べて、参会者とざっくばらんに話の出来るセッションが用意されました。しかし、この時間に私はまたも会場を抜け出して、昨夕見る時間のなかったメアリ・ローズ号を見に海軍基地に出かけてきました。巨大な沈没船の展示の迫力に圧倒され、それからメアリ・ローズ博物館で出会った学芸員のクリスさん(実験考古学)と思いがけず楽しく話しこんでしまっ

たため、会場に帰ってきた時には、引き続き開かれた全体会「包括的な歳出見直し」の時間も終わって、もうお茶の時間になっていました。

閉会討論「博物館にライバル化は必要か」

4時半からのセッションは「閉会のディベート」。これまた、例年のお楽しみとなっている、イギリス議会のパロディです。中央に議長席と議案提出者ら4人（実際には3人）の席があり、参加者はウェストミンスターの下院よろしく、左右に分かれて対座します。

議案提出のティムさん（ロンドン大考古学）は、演説を前に、今日が誕生日ということで会場のハッピーバースディの合唱に祝福され、ついでにプラスチック製のバイキングの角つきカブトをプレゼントされました。そして彼から「博物館にはお互いのライバル化が必要である」という動議が提出されて説明の演説があり、それを受けて支援演説と反対演説が交互に行われました。

しかし、これはディベートであってディスカッションではありません。いかに聴衆にアピールするかに双方ともに苦心惨澹して、実に面白いことばかりいうおかげで、会場は爆笑の連続でした。

例えば、反対演説の方でしたが、今になってライバル化を言うのは「NASAがアメリカ政府から予算を削られそうになってからあわてて『火星の生命』で騒ぎ出したようなもので、本質とは何の関係もない、政府系の官僚組織の通弊でありまして」とか、「それは本来的でない目標にすぎず、スパイスガールやルノーのクリオ（小型大衆車）がやっているのと同じ、出資者の利益のためだけのものがあります」、「‘適者生存’などとうそぶいていると、博物館自体がきょうびの社会から消滅してしまいますぞ」といった調子です。

イギリスの博物館人が、こうした深刻な問題を笑いのネタにしてしまうほど「大人の遊び」にたけていることや、いわゆる「紳士」とは違うということなどが分かります。

ところで、反対演説をする予定の「セオドーラ」さんの姿が、どうしたことか見えません。マンチェスター博物館館長のトリスさんが「では私が呼びに行ってきます」と言って会場から消えると、しばら

くして「セオドーラさん」がやってきました。なんとフワフワした羽根のえり巻きとブロンドのかつらによる女装で、珍しいことをやるものです。声色まで変えてトリスさんのひとり二役となりました。博物館協会の雑誌「Museums Journal」の1998年11月号に写真が出ています。（なお、この号には大会の主要なポイントが収録されています。お近くの図書館を通じて取り寄せが可能ですから、あわせてご覧いただければと思います。ISSN 0-027-416X Vol. 98 No. 11）

両陣営の演説がひとわり終わったところで、フロアからも賛否両論が出されましたが、これまた爆笑の連続。厳正な採決の結果、賛成55、反対67に棄権1名で、僅差をもって、博物館は互いにライバルとなるべしとの動議は否決されました。議長が「棄権の方は？」と聞いたとき1名だけが手をあげ、会場はその勇気をたたえて大喝采になりました。念のために申しますが、私ではありません。

このあと、フロアからの発言も議長によって審査されました。今回の大会を通じてユニークな発言の相次いだスコットランドのボブさんが特等に選ばれて、空気で膨らますビニール製のピンクのブタをプレゼントされました。今年フェローになった彼には良い思い出になったことでしょう。

これで、本年度大会の主要な日程は終わったこととなります。この夜は、MA評議会の特別会議や、私は参加しませんでした。社交プログラムとしてポーツマス港のクルーズなどがありました。

9月25日金曜日（スタディツアー）

この日は、オプションとして、4つのスタディツアーが組まれました。いずれも、近郊の博物館をたずねるバス旅行です。私は「21世紀のための博物館づくり」というツアーDに参加しました。

他に、女流作家ジェイン・オースティンの生家博物館などを訪ねるツアー、モンタギュー卿のカントリーハウスにある自動車博物館ビーリューでの一、フィッシュボーンのリーマ遺跡やチチェスター見学のツアーなどがありました。

ツアーDのコンダクターは、バーバラさんの前、つまり94年のブライトン大会から一昨年（92年）のハロゲイト大会までMAの総裁だったステイブン・ロッ

クさん。現職は、ハンブ州博物館サービスのダイレクターです。

州博物館サービス本部を訪ねる

最初の目的地はハンブ州の博物館サービスの本部。ハンブ州はイギリスの中でも大きな方の州ですが、ポーツマスやサウサンプトン、ソールズベリーなどシティとよばれる都市部を除いた部分が、州の博物館サービスの守備範囲となっています。

その本部はもと農場だったところで、納屋など既存の建物に加えて、専用の建物を増築して現在にいたっています。ここでは自然科学コレクション、考古学と衣料品それに大型の金属製品の保存修復ワークショップを順に見学しました。

自然科学コレクションでは、昆虫標本の整理が行われているところでした。重要な同定の作業は、全国的に著名な研究者に行ってもらっているそうです。標本庫の狭い室内に、整理された標本がぎっしりと詰め込まれていました。植物のさく葉標本は分類、整理が完了しており、台紙に貼られてキャビネットの中に収納されていました。

建物の中で、哺乳動物や鳥類の剥製標本を保管してある部分は、空調を厳密に行って、外部からモニターできるようにしてありました。剥製標本の大半は、100年以上も前のビクトリア時代に地元の業者によって製作されたものだそうです。

会議中にしばしば話題になったアクセスの問題ですが、小型の貴重な昆虫標本がマニアによる盗難に遭わないように、利用はすべて予約制で、初めての利用者には、電話番号を尋ねておいて後で確認の電話を入れるようにしたうえ、係員がつねに同席するなど、細心の注意を払っているそうです。また、特定の属の同定などのワークショップを時折開催しており、地域の博物学協会やアマチュア団体などとの連絡も密にしているとのことでした。

その後は時間に追われて急ぎ足で見ただけでしたが、考古学のワークショップでは金属器の錆落としの過程を見学し、洗濯機と大きな流しの付属した衣料品のワークショップでは、歴史的なコスチュームの手入れを行っているところを見ました。

なお、ここには、イギリスで最初に作られた脱酸素による気密殺虫装置があります。これは人体にも

環境にも有害な薬品による薫蒸に取って代わるものとして注目を集めている装置で、今では、私のいるレディング大学の英国田園生活博物館で先年つくられたものも含めて、国内に数台が稼動しています。

原理的には、気密容器の空気をポンプで抜いていき、減圧した状態で適度に加湿した窒素と置き換えるというのですが、薫蒸と違って、ふ化前の虫卵にも有効なことが明らかになっています。ただし、薫蒸のような効果の持続性はありませんから、処理後はただちに、防虫剤を入れたポリ袋などに密閉することが必要です。

地方都市の中型博物館

次の目的地は、バーク州に近いベイジングストーク市の旧市庁舎を利用して作られたウィルズ博物館。ウィルズというのは人名で、ビクトリア時代に地元の時計メーカーの社主で、市長もつとめた、町の名士だった人だそうです。

町の中央広場に面した一階には、博物館とは別に観光案内所も付属しています。その奥に地層模型やローマ時代の墳墓の展示があり、上階が、おもにこの町の歴史を中心にした展示になっています。最上階には時計のコレクションも展示されていました。ベイジングストークは、ニュータウンとして第二次大戦後に大きな変化をした都市ですが、この町の市民の家庭の居間の様子が、時代を追って復元されているのが見どころです。古いところでは、ところどころに当時の建材を使用した、町のスラムの復元もあります。

時代が下ると、室内には電気製品が登場するようになります。そうした電気製品については、例えば洗濯機などの説明書などが、当時の雑誌などとともに1ページずつラミネートされて綴じてあり、来館者が自由にめくって読めるようになっているところに感心しました。

なお、この館にはエレベーターがありませんが、階段の手すりが改造してあって電動椅子のついたレールがそなえてあり、車椅子利用者の上階へのアクセスがはかられていました。

その後、私たちは、最上階で食事をしながら、現在建設中のハンブ州の生活史博物館「マイルストーンズ」についての説明を受けました。

二千年紀の到来を区切りに、過去のハンプ州の経済や生活がなぜ、どのように変わっていったのかを明らかにするというのがこの館のコンセプトです。館内を歩き回っているうちに歴史とはどういうものかを感じられるように、モノにさわって、過去の物事を経験し、子どもたちが遊んでいる間にお茶も飲めるように、ということで、総工費しめて千百万ポンド。そのうち、建物が千万ポンド。州と町の予算の他に、575万ポンドは文化財くじ基金から補助が行われることになって、博物館建設が可能になったといえます。

これは現在、郊外のレジャー施設のコンプレックスの一部として建設途中ですが、すでに96年から地元の繁華街で市民に街頭インタビューを繰り返し、市民がどういう博物館を望んでいるのかというコンセプトを明らかにしていったそうです。要望の多かった施設・設備としては、カフェ・レストラン、実演、座れる椅子、ギフトショップが多かったとのこと。なお、館名も懸賞つきの一般公募によるものだそうです。

設計を担当した建築家に、館内に昔の街並みなども復元できるように、出来るだけ広々とした長方形の空間を要求した結果、平たいカマボコ屋根のドームをもった、長方形の建物になりました。屋根が平たいのは、周囲の景観に配慮して、余り目立たないようにしたためということです。

地元の町は、45歳以下の人が多い若い地域だということで、来館者の属性として、15歳以下の子どもがいる両親、旅行者、小学校から大学までの見学団を期待しています。更に、レセプション会場として地元企業のイベントにも使ってもらえるように配慮して、館の運営をサポートする副収入が得られることを見込んでいるそうです。開館したあかつきには、私たちが博物館サービスの本部で見学したさまざまなコレクションが、そこで展示される予定です。

このあと、バスに乗りこみ、近所の郊外型スーパーの駐車場から「マイルストーンズ」博物館の建設現場を見学しました。スーパーの駐車場に大型バスが乗りつけることなど普通はないでしょうから、お店の人はいったい何ごとかと思ったことでしょう。

町の小型博物館を見る

最後の目的地が、ハンプ州の西にあるアンドーバー。農村部のマーケットタウンで、博物館も年間の入館者が1万1千人という、こじんまりとしたところ。これも古くからの建物を利用しており、入り口に入って左手が無料のアンドーバー博物館、右手が最近開館して有料の、鉄器時代博物館となっています。

この地域はイギリス国内でもケルトの遺跡の豊富ところで、私は数年前にこの町の北方クームダウンにある初期鉄器時代の遺跡の発掘に参加したことがあったので、鉄器時代博物館の方から見学しました。

既存の建物を利用しているため、それぞれの展示室は広くありませんが、壁面を生かすなど、スペースの狭さを活用した展示の工夫がみられました。最初の展示室は白亜の丘陵が造成されてヒルフォート（丘砦）となっている様子を壁にあらわし、「ケルト人は戦争狂であった」という目につくキャプションがあって、ケルト人どうしの戦いの模様が展示されています。あわせて、砦の堀が時を経て埋もれていく様子も描かれていました。考古学遺跡のでき方を子どもに理解させるためということでしょう。

次の展示室は木造のケルト家屋の内部を模したつくりで、一角には白亜の中に掘り込まれた貯蔵穴も復元してあり、ケルトの家庭生活の展示となっています。

そこから階段を2階に上がると、牧畜や農耕文化を中心にした展示があり、鉄鎌などの生産用具のほか、家畜を代表して牛の全身骨格も置かれています。小さい子どもにはきっと迫力があることでしょう。矢印の代わりに槍先のデザインが示す順路にしたがって別の階段を降りてゆくと、首刈りされた頭骸骨が数点、透明アクリルのシリンダーに展示されており、おしまいはローマ軍の侵入で締めくくられていました。

入場料が必要ですが、一見の価値はあると思いました。常設展示のみです。

次に、入場無料のアンドーバー博物館の方を見学。一階の自然史コーナーには、剥製のジオラマ展示のほかに、地元産の淡水魚が水槽に飼われていて意外でした。その他は中世以降の地域の社会史が中心です。子ども向けに、この土地にゆかりの王の物語を

マンガで展示したコーナーもあります。

マーケットタウンとしてのビクトリア時代の繁栄ぶりが再現されている一方で、底辺層の貧困ぶりを示すスキャンダルとしてアンドーバーを全国的に有名にした、骨粉肥料の製造工場で、飢えた労働者が原料となる動物骨の髄を食べていたというショッキングな事件のジオラマ展示もありました。

社会史のコーナーでは、バイジングストークのウィルズ博物館と同様、すべての展示室に、冊子様式の解説がページをラミネートされて自由に読めるように置いてありました。こちらは、就学前の子どもたちでも楽しめるよう、楽しい絵入りの子ども向けの解説が特に低い位置（ひざの高さ）に置いてあるのが印象に残りました。ただし、車椅子での上の階の利用が難しそうなのが気になります。こちらも常設展示のみ。

そこを4時に出発して、夕方のラッシュで遅れな

がらポーツマスに戻り、新しく知り合いになった皆さんや、6年半ぶりに会った懐かしい知り合いに再会を約して、今年度の大会はこれでいよいよお開きとなりました。それにしても相変わらず、充実した内容でした。

思いがけずポーツマス駅で再会した竹内会員は、フィッシュボーンのローマン・ヴィラ遺跡博物館やチチェスター聖堂見学のツアーに参加したそうです。このローマ博物館といえば、4年前のブライトン大会のツアーの時、一通りの解説が済んだあと、学芸員のディビッドさんに私一人だけ特別に案内していただき、興味深いお話を聞かせてもらったことを思い出しました。

1999年の大会は、9月27日から30日にかけて、スコットランドはエジンバラの国際会議センターで開催されます。この他、MAに関する情報は、下記のウェブサイトをごらんください。

www.museumassociation.org